

異種 X 紅魔館

東方異種姦CG集



基本絵 **25** 枚

差分合計 **401** 枚

◆税抜価格 **800** 円

※出産は別フォルダに隔離
グロ耐性がない方も安心です



本人達は温厚とされるものの、醜い外見のために排斥され、行き場をなくしたゴブリン達。

紅魔館の面々の温情により下僕として仕えることとなり、彼らは平穩に暮らしていた。

しかし、あまりにも強く、美しく決して手の届かない高嶺の花たちとの暮らしは、ゴブリン達の心に眠る性欲と征服欲に火をつけ…

周到な準備をした上で、ついに叛乱が決行された。

紅魔館の住民の

奴隸化計画とも言っべきものだ。

「やあっ！放しなさいよー！」

「前々から「き使いやがって、
イラついてたんだよう……」」

「そんな、イラつくとか言われても……」

「可愛い女主人たちが多すぎてよ、
溜まってしょうがねえのよ」

「しょうがないわ、逆らったからには

容赦なく潰すしか……！」



「とりあえず動けなくなるから
下着も楽に脱がせるな！」

「や、やめなさい……
本当に許さないわよう……！」

「おお、綺麗なスズマンじゃねえか……
最高だな！」

「ム、ム……本気だわ……
やだ、体が熱くなつて……！」



「ハハ、すっかり出来上がったちまつてるじゃねえか、
触りもしないで見られてるだけなのに
もう糸ひいて発情してやがるー!」

「う、ん……ト……ん……んな……恥ずかしい……」

「あの高慢なパチリー様が
……は……」



「わっ、ちんぽを俺は後になんか挿ぐせー」

「う、後ろっっー」

「い、嫌あー」

「無理よおっー」んをおっきの…」

「確かにきついけど
しっかり入っていくぜえ…
パチュー様のアナルは
これで非処女だな！」

「っ、んっっー」

「すっげえ濡れてるぜパチューリ様、相当感じてんなこれ」

「いや、言わないで、あ…っ、はあっ！」

「めっちゃ気持ちいいわあ…」

「マ〇〇と俺のチンポが完全に一体化してるみてえだ」

「ケツももう最高だぜ、こんなに気高くて美しい女の anal をオナホみたいに使えるなんて幸せすぎる…っ！」

「だめ、だめえっ…、お腹が、きついっ…っ！」

「ゆるしてネ…」

「いきなり、こんなに凄いレイプされたら、
出されたら…ダメになっちゃうからあ…」

「じゃあ徹底的にタメてっせなぞっ…」

「おらああっ…射精すぞっ…」

「やめて、やめ、やめ、やらああっ…」



「射精るっ…パチリー様あっ…孕めようっ…」
「~~~~~」

「ず、凄い量…
ゴブリン達の、精液が中…」



「こっただけ出したら下手したら
一発で孕んでるかもな…」

「はあっ、はあっ、うっ…溢れてるっ…」

「妖怪の女は異種に種付けされて妊娠してから
出産後二月までは
ほぼ霊力が使えなくなるって
あんたの本に書いてあったぜ？」

「」の調子で紅魔館の奴ら全員
俺らの子を孕ませちゃった」

「んっ…うっ…」



「っっ…身精すざっー」

「あはあっー」

びゅっ…!!
びゅるっ!!



「っっ…ふんた、下等を「ラン」のキ種で
産を汚される気分はよあっー」

「っっ…許さない、
んあっーあも…」

(…す「い量…噴水みたいに出てる…」
「これからこれだけレイプされるんだらう私……」

「おっし、種付けばっちりかな、でも念のため
あと100回くらっら膣内出ししてんか」
「せ、絶望だよね、これもう……」



これから、一体どうなるんだろう...
こいつら私の知らない間に
色々な薬やアイテムを研究して
確実にレイプする計画を立ててたんだわ...

妊娠させられちゃう前、
手を打たないと...



「う、うああっ……
なに「れえ……」

「錬金術で作る人造生物のレシピがあつたもんでな、
プレイに使えるやつを作つたんだよ。
いい眺めだぜえ」

「……」

（ほ、恥ずかしいなんでもんじゃないわ……!!
こんなに広げたことなんて一回も……）

「パチューリー様の子宮口が
ばっちり見えるぜえっ」

（うう……中がスースーする……）

「おねがい、お願いだから
どうかもう許して、

誰にも言わないから……」



「注射……？？」わわわわ……」

「膣内に射精してもなあ、
ごく一部の精液しか
子宮には入っていかねえのよ。
子宮口の隙間がほっそいからなあ。」

「だから今柔らかくなる薬と……
あとは排卵誘発用の成分を
注入してんのさ。」

「な、何考えてんのよアンタ達……」

「簡単だよ、
紅魔館の連中の下働きはもうやめて、
これからは俺らがダンナ様なんのさ。」

「全員ガッツリ妊娠させるんだな……」





(なんて...「うき...」
だ、だめ、しびれてきた...)

(うき...)

(...)

「指が入るくらいにゆるんだなあ...
じゃあ行くぜ。」

「ひ、ひ...」

「奥の処女っ……」

ずぶっ……

「がはあああ……」

「いただき……」

「うっ……子宮口で
ペニスくわえこんだ感想はよっ」

「お、おふ……」

かはっ……」

「ハハ、まともじゃへれる状態じゃ
ねえみたいだな」





ずぼんっーぶぼんっー
ずぼんっーぶぼんっー

(だ、ダメ、
妊娠、させられちゃっつー…
逃げなきゃだめえっ)

「うおお…征服感ハンパねえな…
奥の奥まで、完全に俺のものになっつる…」

「ゆ、…許してえ…おねがっつ…」

「許すわけねえだろっー！
こんないまん…」
「バッチリ種付けしてやるっー！」

「あんっ…ダメだったらあっ♡
そんなに激しく動いたらイっちゃうっ…」

「う、うおお…精液溜まってきた、
チンポ破裂しそうだっ…」

「レイプで種付けなんてヤダっ、
だ、ダメ、い、い、くっ…」

「イクぞ、パチリっ…イクぞ、
イクイクイク…」





ぼびゅっ!!

ぼびゅっ!!

「んあ~~~~~」



ヒン...ヒン...

終わっちゃった...
こんな濃いの、マジで吐きたらもうダメ...
(...)

(...おまんこ...おまんこ...おまんこ...)



……ゴボオツ

「あゝ〜射精た射精た」

「すっげえ出したな」

「どうよー？パチユリー様」



「壊れちゃいないといけどな」

「あー笑ってるよ
いい」としたって感じたな」

「しかし魔法の薬ってのはすげえなあ
たった2日で
輪姦しながらなのに
こんなに腹がでかくなるなんて…」

「く、苦しい…お腹大きいのに
太いのがお尻に…」

「大丈夫、すぐ射精してやるから！」



「んぎぎっ…苦しんどっ…」

「頑張れ、頑張ってひりだせや！」

「う、座みたくないよおう！
私、ゴフリンのお母さんなんて
いやだあああ！」

「ダメだろちゃんとしっかりしないと…！
ホラ、いきんで…」



「ぎひひひひひー」

「かはあつ……」こんなフタ妖怪とセックスなんていやあ……」

「お前が逃げて

助け呼び「むん」を呼ぶからならだるつがよ」

「お仕置きはしっかりしねえとね」

（太いドリルみたいだ……っ

奥までしっかりえぐって……っ！

（……こんなの……ガマンできな……い……っ……）

「こんなにお腹膨らんでる…」

「臨月だねえ、パチユリー様…」

「どよよんたの孕み袋として出来上がった気分は」

「…怖い……ゴランごの赤ちゃんのほつが
どよよんただったってわかったわ…」





メリ…

メキメキ…

「んぶおお…んんんんん…」

「…おおおおおおおおお…」

「ぼっちりリンの緒どうなってるねえ」

「……んんん……んんん」

「泣き顔可愛いねえパチョリ様、
またすぐレイプしてあげるからねえ」

「んんん」





「お—すげえまたまた産まれるわ」

「も、もうやだ…もう産みたくないよお…」

「次の相手はどんな下等な妖怪がいい？
蟲とかゾンビとかいるあるぜ？」

（誰か…助けて…
発狂しちゃいなうら…）

「他の皆はだませてたみたいだけど、
やっぱり害虫だったわね貴方達…」
「パチュリーに酷いことをしてくれたわね。
あとは貴方一人よ」

「いやお見事お見事、時を止める能力はハンパねえな…
俺の仲間をあとという間に皆殺しにするとは
やっぱり咲夜が一番危ねえな」

(何…?この余裕は一体…)
「まあいいわ、死になさい」





「な、動けない…?」

「パチューリーの部屋にあったラツき。
お前さんの能力を趣味で研究して
より強い能力を持つ時計を
作ってたみたようだ」



「そんな…馬鹿な…!」

「さらに巻き戻す」こともできる。
ぶっ殺された仲間も元通りだ」

「嘘……」

「俺らを殺してくれた落とし前は、
両方の穴と口と……」

「い、嫌……」

「そうだな、最低でも殺した回数だけ
お前が新しい命を産む」ことで
帳尻が合うかな？」

「嫌ああああ！」



「「こんな…こんな屈辱…！」

「さすがにいい体してんなあ…
入れるせえ…メイド長様よお！」



(動けない…ほんの少しでも動けば
こんな奴ら一瞬で…！)

「「殺してやる…！」

ジュジュジュジュ

「ジュジュジュ」

「いたっ……」

「なんだ処女だせこイツ……
男が怖い反動で
俺らにあんなに高圧的だったのかよ!？」
「くくく……」



「でももう怖がらなさいだいたいだせえーっ
完全に繋がってるし、「これから長い付き合い
になるんだからな！」

ずちゅっ！

ずちゅんっ！

「あ、あぁっ……」

やめ、やめてえっ……」





「おお…そのそのらくせ…」

「高慢なメイド長の処女まんじゅう…
中出しだあ…」

「…」

それから何回犯されたのか覚えていない。

50回以上は確実に、
腹部ははつきりわかるほど
精液で膨らんでいた。



「ひびくー何なの」

「どきなきい、離れろっー」

ずんずんずんずん...

「後ろ」



「やめてえうーやめさせて、
こんなのに射精されたら…あ…
あああああ…」

びゅっ…

びゅるるっ！

「うわーひでえなあ！これ…
超たっぷり射精されてんじやん…」

「ぐ…ひびく…」

「紅魔館で唯一の人間なのに
人間以下のもの孕んじやって
大変だねーりゃ」

「ゆ、許さないんだから…こんな仕打ち…」



「うわーひでえ...
ケツと喉にさるチンポくわえながら
臨月かあ...」

「...うんげん、うんげん、うんげん...」



（お、お腹が…赤ちゃんが…
出てきちゃうっ…）

咲夜の産道がぎりぎりと言を立てるよっ、
混血の赤ん坊を産み落としていく。



「んんんん！！」

「おお…出産中に喉射とか死ぬんじゃねえのコレ…」

「うわーすげえ汚いのが産まれたね…
おめでとつ咲夜ちゃんー立派なママだねー!」

(ママって…そうか、「これ、こんなのが…」
私の赤ちゃんなんだ…)

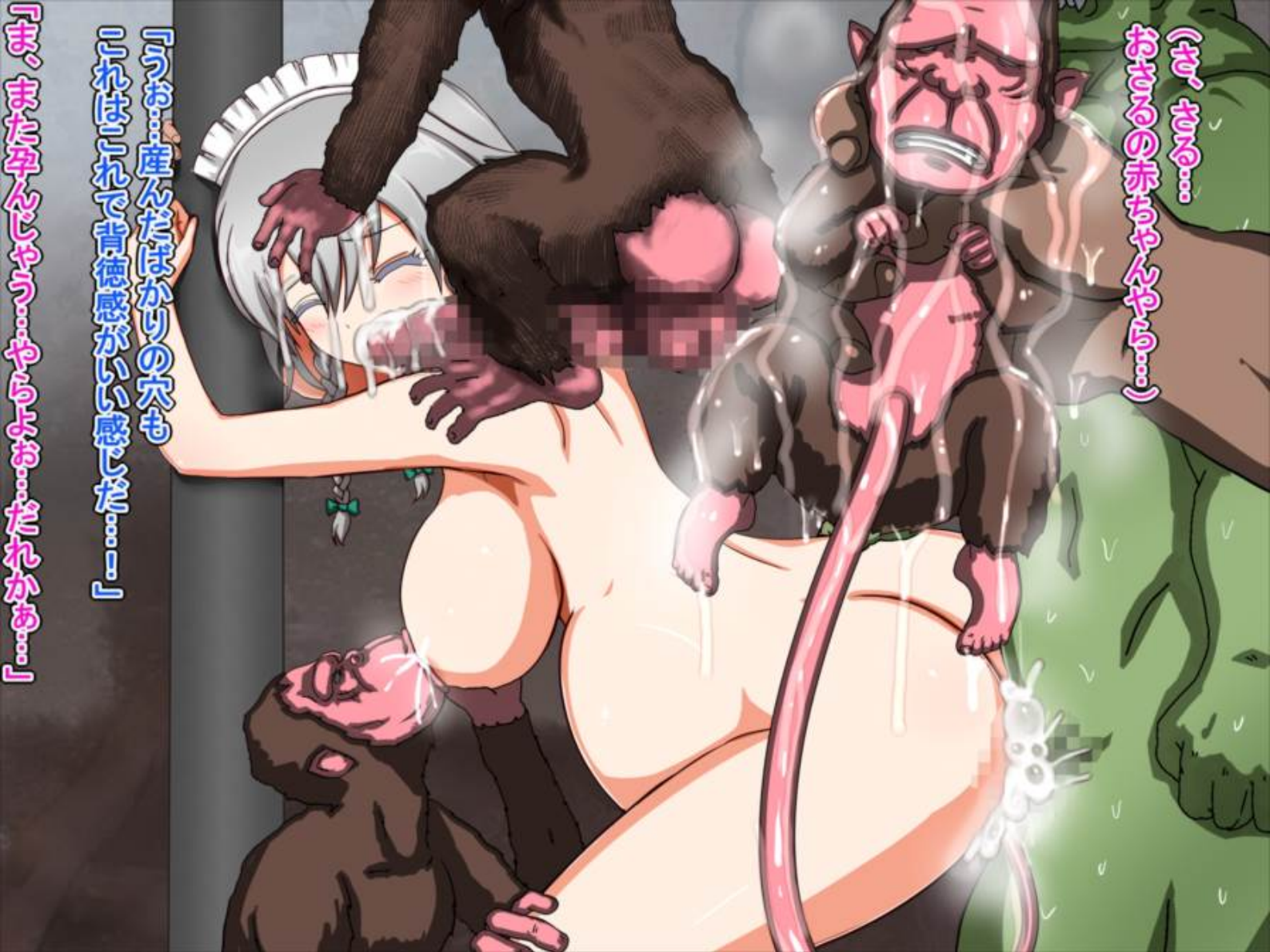
「初乳他の猿に飲まれてるし」

「次また俺らの精液で受精してねー!」

「…う…う…」

「さすがに心がへし折れたかな?」





(お、お、お...)

おさまるの赤ちゃんやら...)

「うお...産んだばかりの穴も
これはこれで背徳感がいい感じた...」

「ま、また孕んじゃう...やらよお...だれかあ...」

「人間の体は再生能力ないから
本当だったら出産したあととは中古感でちやうけど、
巻き戻せばまた綺麗になるから
バッチリだな」

「能力を道具で再現っていつでも限界があるはずよ…
必ず復讐してやるから！」

「怖い怖い、でも要は咲夜さんの心がぶっ壊れれば
能力を使う」と自体できなくなるからねえ…」

（絶対に屈するもんですか…！）



「はい、時間停止」





「咲夜さんのマ○ンって

本当に気持ちいいっすねえ…」

「時間止められてる気分は

どうだっこの名器マ○ンめっ—」

「んっ……」

「射精るっ……!! 抵抗できない
メイド長の膣内に射精るっ!!」

どくんっ!!

どくんっ……



「ミノタウロスの極太ペニス
ばっちりハマってんなあ…!」

「本人はまさかこんなもんに
種付けされてるなんて夢にも思っ
てねえだろうな…!」



「グオオオツ!!」

「おお…すっげえ量
ぞち「まあしてら…」」



「うっっ、飲め、飲めえっ…!」

「ゴブリンの下等な精子飲み込めっ!」



「あゝスッキリした…!」

「さすがにちよつと休憩してえな、
そろそろ解除してやっか」





「あ...!!? あああああつ!!」

「!!?」

ビクンツ!!

ビクンツ!!

ブンヤンツ!!

（な…なにこれ…体が…）

（電気が流れたみたいなのに…
時間が止まった最中にレイプされたの…!?）



「時間停止十種付けな」

「よし、ダメ押しにもういっちょよ…!」



「ブゴ、ブゴオオオツ!!」

「うわあ……すげえ量
こりゃ孕んだな…!」



「ゴフンッ、ゴフンッ」

「咲夜さんの乳ハンパねえ…
腹も胸もでかくなりすぎだろ…」



「はい解除」

「ぐ……んぐんぐんやあああああ……」

「母乳撒き散らしながら射精されて
幸せそうですねえ、メイド長……って
聞「こえてねえかも……」



既に繋がれて、
胸に魔法生物で形づくられた
搾乳器をはめられ、
ただただ犯され続ける。

ゴブリン達は近くにはいなかった。
今頃他の住人を襲いにやっているのだらう。



動きがあまりにも激しくて、意識が吹っ飛びそうになる。

私はあくまで人間であって、こんなバケモノサイズのものが本来入るはずがないのに、

バツリ拡張させられたそこは、スムーズに巨根を受け入れている。



「うへへ…口があいてますぜ、と…」

ヒゲをぶら下がるようにして
小柄なゴブリンが私の口に
ペニスを挿入する。

考えられないほどの屈辱にも、
少しずつ慣れていく自分に驚く。

そして、獣が動きを二気早め、
私の意識を忘我の域へと
押し上げる。



びゅるるるっ!!!

ぶひゅんっ!!

破裂するような感覚とともに、体内に
生臭い精液が弾け散る。

熱い。そこ...
なによりも気持ちいい。
目の前が真っ白になるような快感に、
私は何度も何度も絶頂を迎える。



いつしか腹が大きく膨らみ、
子宮は破裂寸前まで
精液で押し広げられていた。

もうどれくらい犯され続けているのか、
時間の感覚がない。

射精される感触で目を覚まし、
絶頂の海の中で意識が消える。



臨月を迎えているのが自分で分かる。

色づいた乳首、そして、
重く響いてくる陣痛。

だめだ、産みたくない…
こんなものを何回も産まされたら、
完全に壊れてしまう…



「かっ……かぶっっ……
ふっあっ、あっ……」

ずるり……

「ぐあああああああっ!!!」

獣妖の仔の頭部が、
私の産道を引き裂くようにしながら、
産まれ出た。

能力を使っ……んんんか……んんんんん、
凌辱の激しさと精神は……んんんんん、
とても必要な集中力が発揮できない。

(んん……んん……様……んんんか……し……無事……)

「放してよー!」んな」として…
殺すわよ!」

「おお怖ええ…大丈夫ですよフラン様、
俺らほとりあえず襲う気ないんですよ」

「…じゃあなんで」んな」じ…」

「いつも「キマリとかハエ」とか言いたい放題
俺ら「マリリン」に言ってくれてたおれに、
いい相手を用意したんですよ」

「相手って…まおか…」



「いやあああああ!!!」

「巨大化させたゴキブリとハエの生殖器はどうですか?」

「ケツでハエのチンコ受け入れる吸血鬼なんてめったみませんぜ!」

「や、やだあああああ!!!」

「気持ち悪い、助けてよおおお!!!」



「う…ああ…」

「顔が赤いし息も荒いっすねえ…」

「ぼっちり種付けできるよって」

「品種改良してあるんで」

「心配なく…」

「種付けして…」

「赤ちゃんでもおなをいっすよ…」

「そんな…嫌ああ…」





「だれか、誰か助け…」

「ああああああ!!!!」

「あ…逆流してる…」

「いやあ可愛い悲鳴でしたねスラン様」

「やだ、妊娠やだ…」

「大丈夫ですよ、できるまで犯させますから」

「う、う…」



「なんで…こんなにくすぐ…？
まだ一日も経ってないのよ…」

「時間進めたんで。Fしても
オッパイができてよかったですねえ」

「お、お腹のなか…
何かがゴソゴソ動いて気持ち悪い…」





「痛い……お腹痛いの……」

「……アッ……アッ……
……何か、何が……
……何か……」

「はあ、はあ……お……
おっぱい、すわねてる……」

「かわいいですか？
メツチャキモいですが……」

「ん、ん……何でこんな……」

「逆らう気力をまずへし折ってかないと
安心して交尾できません……」

「ん、ん……」



「アハハ…すこい、こんな時にまで
フランのニとレイプしたいんだ…」

「うへえ…生まれたのがミンチになって
挿入するたびに練りこまれて
ぶちよぶちよいってんであれ」

「あとで時間もどして新品にしてから
フラン様とセックスしような」

「あはは…ニともが全部死んじゃうって
そんなしたら…」

「でも私をもっと産んであげればいいのかな…」



「あ、あはあつ…」

どくんっ！
どくッ！

「ペ、ペーストセックス、
ウツゴキのシヤムセックス…♡
気持ちいいっ♡」





「あん、すっぴん...!」
「フランちゃん、可愛いようー!」
「マジで可愛いっ!」

「すっかりいい子になって
おちんちん締め付けてっ!」
小悪魔吸血鬼めっ!」

「体のなか、全部、ゴブリンさんたちの
おちんちんでいっぱいだね？」

「おちんちんがゴブリンさんのおちんちんでいっぱいだね？」

「♡…ふん…ぽん…ぽん…♡」

「…ぽん…ぽん…ぽん…」

「♡…ぽん…ぽん…♡」



ぐいぐいぐいぐい...

ぶびゅ、ぶびゅ、ぶびゅ...

「ああ、すっごく気持ちいいよお...
ゴプリンさんたちは蟲と比べたら
全然気持ちわるくないから、
大好き！」

「俺もフランちゃんがこんなに
優しい子になってくれて嬉しいよ...」





「...お尻を脱いで服を脱いで...あはは」

あはは...あはは...
あはは...あはは...
あはは...あはは...

フンちゃん…

「おお、そろそろ産まれるな…」

「臨月なのに、に精液を
喉鳴らして飲み込んで…
フランちゃんは
本当に淫乱妊婦だなあ…」





「はあはあ…おなか、くるしい…」

「蟲の時と違つて、なかなか生まれないよお…」

「じゃあ優しい俺らが手助けしてやるゴフ」

「ぐぐあぁっーお、重いよお…」

「柔らかくてあつたけえ腹は
足触りが大変いいゴフ」

「ほおれほおれ、体重かけてやるべえ」

「お、お腹破裂しちゃうっつー！」

死ぬ、死んじやうよおっー！」



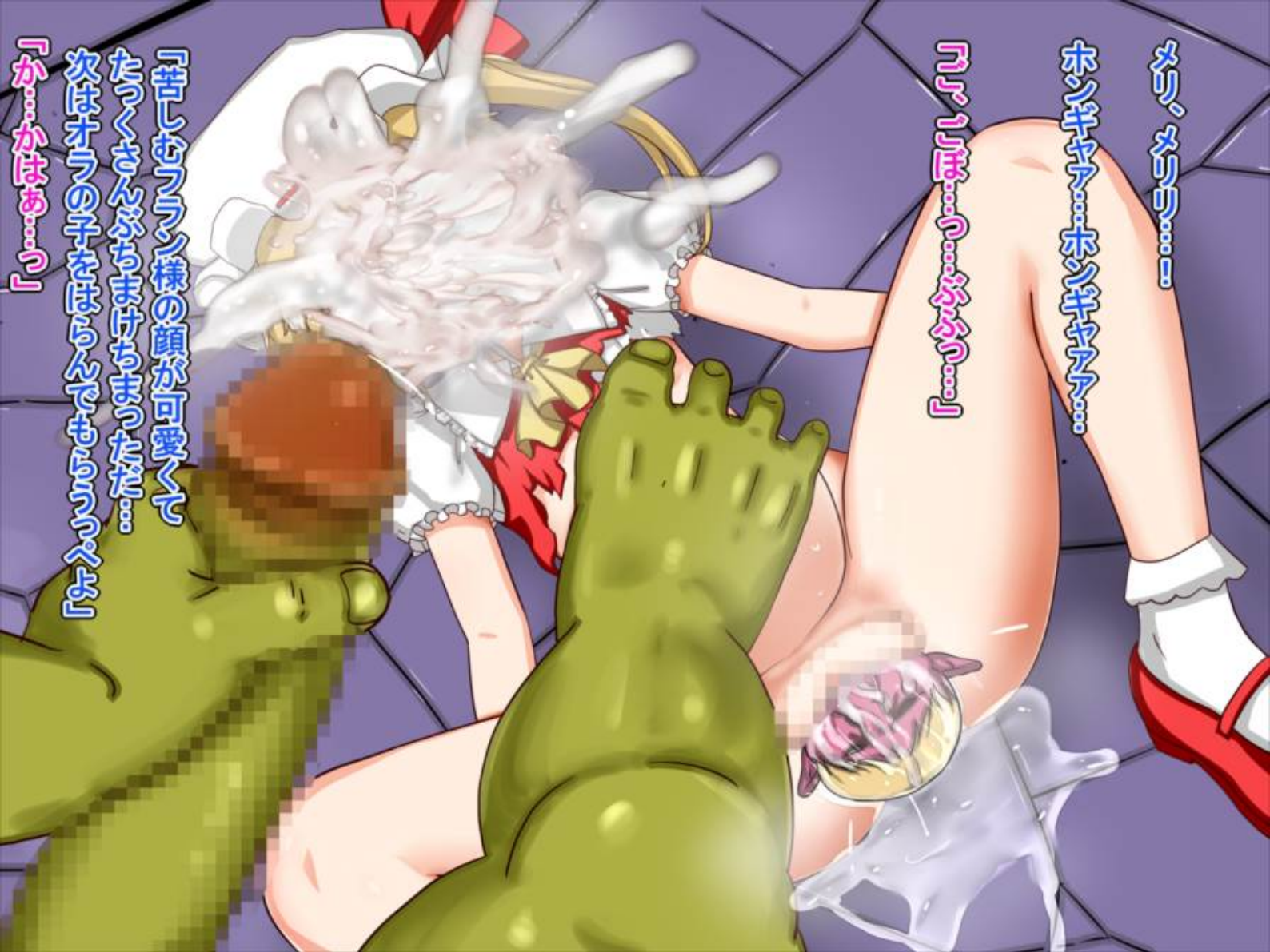
メリ、メリロ…

ホンキヤァ…ホンキヤァ…

「♪♪♪世…の…女…」

「苦しむフラン様の顔が可愛くて
たっくさんぶちまけちました…
次はオラの子をばらんでもらうんですよ」

「か…かはあ…っ」



「すっ……すっ……」

「パチュリー様の魔法アイテムはすげえよな……
昼と夜を錯覚させるお香なんてものがあるんだから」

「うっ……む……」

「おかげでレミリア様は熟睡してるぜ、
こんなひどいエロピンチなのよな……」

「吸血鬼じゃなかったら即死サイズのペニスだけど、
多分平気だろう」

「挿入ったあ！」

「が…がはっ!?」

「あ、あなた達…!?」

「一体何を!?」

「が、体が引き裂けそう…!!」

「レミリア様の睡姦獣レイプとか
なんか感動するわ…!」

「な、何を言ってる…、や、嫌あ…!!」



（なにこれ…
ゾンビの…馬あ…!?
あそこは、
すごい大きいのが
めりこんでる…!）

「うあああ…
こんなの…
こんなの入らないっ…!」

「可愛い顔して苦しがつて…
たまんねええー早く俺らも
レイプしてえよ」

「あせんなって、こうして
ガツンと心をへし折って
魔力がとも使えないような
精神状態に追い込むことが
大事なんだぜ。」

全開の魔力なんて使われたら
時止めの時計やら
もるもるの小細工が
全部吹っ飛ぶ可能性があるからな…!」

「コエインー」

「ん…ん」

「う…うあああ
あああああ」

「びゅるるる…」

「びゅるるるる…」

「お、お腹が…
子宮の奥まで獣の…
せい…えき…
流れ込んでくる…」

「おお…噴水みたいと
射精してやがる…」
「りゃっかり卒んだな」



「ユ」で時間停止ー」
「イヤホンとかされたら
マジでしゃれにならんかな…」



「馬のんぶ」
どろろまじろんせ、
産むの「邪魔です」

「で、腹と乳だけ時間を進めると…
あつらつ間」でまあがりだ」
「おおすげえ…射精と同時に
出産する感じ」なるんすね」

「永遠に生きるからって、
見た目が可愛いからって、
いつも楽しそうにしゃがって…
俺らの苦しみを少しはお嬢様」
わかってもらわねえとなー」



「まだ反抗的でもねえ、ソフィアちゃん」

「……」

「もう使用済みの
淫乱マン」なんだから
それ「ふさわしい表情
してくれなう〜」

「どんなに体を汚されても、
「いつら」心まで屈服するもんですか……」



「反抗的なミニマムの『あー』
愛の射精を喰らえっ！」

どびゅっー!

どびゅんんんー!

「ん、んんんん……」
(ま、また射精された…
ひどい味と臭い…)



「飲み込まなかったら別の牢屋にいる咲夜ちゃんが殺されちゃうよ?」

「……」

「おお、素直じゃん、いいねえ」

「下の口はもっと素直だとな、もう子宮まで開通してるし、絞り上げるように動いて精液飲み干してるぜー」
(今に見ていなさい……)
咲夜も助けるし、二つらは全身引きちぎって殺してやる……)



「つらそうだねえ、さすがに
一週間ぶつつつつけて強姦されると
結構来るもんがあるかね」

「腹とかマジで精液袋だわこれ。
ちやつぽんちやつぽんだもん」

「こんな「きつたないザーメン」の「ムニムニ」
まだ「デイン」吐つてる俺らついで
マジで紳士だよなあ、ギヤハハハハ」

く…く…こんな「苦しくても
折れちゃだめだ、こんな「くへんい、
耐えてみせる……」





「おおおおおおお!!!」

「やだっ…
いくらなんでもこんなバケモノと
セックスなんて…!」

「いやあ知り合いの猿妖の
族長の子で…」

「こんなだから嫁が見つからなくて
困ってるっーから」

「レミリア様のノーブルマードで

「発いのを産んで

「やってくれよ!」

「嫌、絶対嫌あ!!!」

「こんな、汚くて臭いケモノと……っつて
ちよつと待ってー！
出さないでーいやあああああ!!!」

「ねねねねねね!!!」

ずびゅんんん!!!

「ぎゃあああああ!!!」





「え……え……え……」

「……」

「あーはいてる……」

めっちゃ可愛いわあ……」

すいすい……あつあつ……
ぬさぬさ……」

「な、あなたあなた……」

「……」

どぐん、どぐんっ！

(ま、また射精…)

「うわー両方の穴が
精液まみれじゃん…
何回やられてんだあれ…」

「100回は行ってるな、
サルにオナホ与えたら
100回なるんだな」

「く、苦しい…、もうっ、
やめな…さっ…」

「おあああああああ」

「いほおおっー」

(の、喉の奥から…精液がっー！)

「いほおおっー」

「お、オデは、メスをながすやんせ、かならず」
「うやうやんで、」
「だたねっで、
体の中全部よ」
「すんたも…」

「れ、れみりあも」
「わだ」
「オデのものだ、せん」
「いっ」

(そ、そんな…体の内側全部がもう…)

(このクソザルの精液で汚されちゃったなんて…)

「番犬のケルベロスとどうして私が
しなきゃいけないのよー！」

「だってレミリアは今
犬以下じゃん…
お前の初めて奪ったの
馬のソソビでしょ？」

「あんなわけのわかんないバケモン
出産までしたんだから
いまさら貴族言っただろ」
「……」





「咲夜に会わせて欲しいけりゃ
ケツ上げて誘いな」

「わかったわ…はう…はう…」



「余程」なれたレミマンが
気に入ったんだらうな…」

「そんな…もう…」
（ああ…こんなところばい
射精してる…）

(ううう…また妊娠…)



(何回犯されて産まされればいんだらう…
咲夜やパチュリーは無事かしら…?)

臨月近くのある夜、
おぞましい外見の蟲が
レミリアの背中上のしかかった。
ゴブリン種にけしかけられたのだらう。

「な…何するの…」



産卵管と思しきものを
出産を控えたレミリアの産道と
子宮内を抉り続ける。

「や、やめな…」
「あ…赤ちゃんがいるの…」

「武術の達人の紅美鈴つっても
色々な呪具や便利アイテムの前には
大したことなかったなあ！」

（か、体が動かない………いつら
時間を操れるの……!?）

拳を握れば

一撃で倒せるような雑魚の
ゴブリン達が、

動けない美鈴の手を

勝手に使い、

ペニスを手淫させている。



「オラッー喰らえー」

「オラッー喰らえー」



「Jの……算してなちらよー」

「はは、こんな「ベスト」になって
でけえおっぱいが台無しだぜ」





美鈴に策が無いわけではなかった。

龍脈という地中のエネルギーラインを通して
霊夢に助けを呼んであるのだ。

だが、彼女が来るまでどれくらいの間が必要か。
歯を食いしばって、待たねばならない。

「あゝ姉妹重ねてレイプできるなんて
ゴラリんやっつてよかったわあ…」

「く…く」

「お姉ちゃん…」

姉妹が互いにかわす言葉は無い。
なぜなら、互いの確執は未だ
残ったままだからだ。



「ゲゲッーレミリアのアナルいただきー」

「=J=」

「これで姉妹そろってアナルレイプだな！
めっちゃよく締め付けてくるぜえー」

「はあっ、はあっ…」

「だ、大丈夫？お姉ちゃん…」



「しかしあんだけレイプされて吐産までしてると綺麗なもんだなあお前らのマン〇」...

「あ…ひ、広げないでっー」

「恥ずかしいよお、やめてっー」



「うるせえ！ケツにテンポ入れて恥ずかしいも何もあるかよっー」

「あはあっー」

「ほれ、指一本でも
キニウキニウトしめつけてやるぜー」

「…ムム、ム」

「や、やめておろせー」「これ以上
何かしたらおろさるさななんだからあつー」



「あ、いぐっ、いっちやうやうおっ……」
お姉ちゃん、お姉ちゃんっ
たすけてええっ……」

「ふっ……ぐっ……」
んおっ、んおおっ……」

「おらおらおらおら……」
イクゾー……そろそろ
ケツにもマ○……」
熱い精液
くれてやんぞおっ……」

「き……来て、きてええっ……熱いせ……えき、
すっ……ほっ……の……おっ……」
「んんん……おっ……」





どびゆるるっ……!!

ビュルルッ!!

ドバァッ!!

「……んんんんんん」

「わ、私ももっだめ……っ」

「んんん……っ!!!」

「へへ…この小さい尻に
チンポをすっぽすっぽ
出し入れするのは
いつやっても飽きねえなあ」

「き、気持ち…いいです…か…?」

「お、しおらしいねえ…」

「どうどう心が折れてきたかい」

「はい、もう生意氣いけません、

レミリアはかわいい子になります」

「ミナリンさんも、オークさんも、
みんなレミリアで気持ちよくなってくれて、
嬉しいんだよ…」




「ムニウして
がんばってセックスしてれば、
みんなを殺さないで
くれるんですよねえ……？」

「そっそっ、だから頑張って
マ○」締める」

「わかりました、が、がんばって
ま、マ○……しめますっ……♡」





「しかし青空の下で
日り吸血鬼をレイプするなんて
最高に爽やかな気持ちだねえ」

（レイプはもう気持ちいいけど…
弱ってるから日差しがすごく痛い…
灰になっちゃいそう…）



「んあああああつ!!」

「アムリアちゃんもどう思うぞ?」

「うふふ……ミツハからくまおっ……」

「しっかり受け止めてね……」

「ちいさな子宮でエロ精液っ……」

ぷりゅりゅっ……

「ほ、ほいっ……きっ……きっ……きっ……きっ……きっ……」

「うおお……かわいいロリ吸血鬼……」

「ガツッリ……膣内射精いっ……」

「あっ……あっ……、かはっ……」

「ミコリマちゃんもばっちりイっちゃったねえ…」

「ほ、はい、すっぴんイっちゃいました…♡」

「こうやってると恋人同士が
ランラン青姦してるみたいで最高だね♡」

(……)

「ぞ、ぞうですわね…」



「俺は乳はあったほうがいいからよ、
妊娠中の胸に時間もどして
ガッツリレイプすっぜー」

「あはあっ、おっぱいなんかなーっ、
なんだか変な感じい…」



「くぐぐ…全部中」
「あ…中出し大好きですっ♡♡」

「くぐぐ…全部中」
「あ…中出し大好きですっ♡♡」

「げげ…」

「げげ…」

「おちあつー巨乳レミリアと青姦レインで
中出しだあっー」

「あ…すっ♡♡」

「びびんびびんっで、入っ♡♡」

それから何人に外で犯されたかよく覚えていない。

気がつくとお腹は妊娠したようにパンパンになっていた。

全身には飛び散った精液がまとわりつき、

結合部分はもう粘液が重なり合っていてどこにも性器があるのかわからないほどだった。



「うおおおーやあぁー孕めスエー♪ミニマ〜!!!」

「あ、あぁ……っ
こんな中……っ、
う、嬉しいですぅっ……」



「やっとわかってきた……
吸血鬼だらうが、
ヨウリンだらうが、妖怪だらうが……
女は「犯されるのが当たり前なもの」なんだわ……」



「んっ…すい…
どんどん射精る…」

「まだまだだ、フランは
尻もイケるからな、
取っておきの相手を
用意してやったぞ！」

びゅんっ…
びゅんっ…
びゅんっ…

メリメリメリイッ!

「ぎ、ぎびぶぶぶ...
こ、壊れちゃいそう、
おしりダメになるっつー!」

「頑張れ!頑張れよフラン!
お姉ちゃんみたいに
立派なビッチになりたければ
しっかり呑み込め!」

「が...がんばりやうっつ...!」





ぼちゅんっ!!

「ね…根元まで…
はいたあああ…!」

「ええええええ…
「っすすっすっすは広がりがたまたた…
女体の神秘だな…」



「う、動いてる、
お腹の中じゅう、
長いのと太いので
かきまわされてるんじー」

「こんな、こんなの
ヤバイよう、
脳みそまで
ぶっ壊れちゃうんじー」





「んんん…んんん…
いきやなな…」

「こんな獣のチンポで
お腹えぐられてう、
アナルにも前にも
出されたら、
戻ってこれなく
なっちゃうっ…」

「Fuckingのさめたらなっ」

「んん、出して、出して…
フランのお腹全部
熱いので
バンバン…」





あ あ あ
あ あ あ

どぼおっ...!!

ポロポロ...

どぼおっ...!!





(体のなか…全部…
せーえきがめくって…)

「ぶはあっ!!!」

(胃も腸も喉も…
全部オマ○コになったみたい…♡)



「え……」

霊夢はしばらく目の前の状況が理解できなかった。

美鈴から龍脈を通じてのSOSを受け取り、紅魔館のSOSを救うべく来たは良かったが、

ゴブリン達との戦いの最中からいきなり記憶が飛び、

気がついたら全裸で厩の台に寝かされていた。

吸血馬とその勃起した巨大なペニスが見界をほぼすべて塞いでいる。「なにこれ……」



「う、馬っつちもどつと、何するのさっつー」

（やばい、時間でも止められたのか…私裸だし！）

「ちやうと待ってー何してんの…ー
やめなさいっつー」

（ジュジュ、私のジュ…）

朦朧とした意識ながら、
女としての本能で
迫る危機を察知する霊夢。

（犯す気だ…!!!）



「うん……」

みぢりっ……

「やめ、やめなさい、
滅ぼされたくないならつて
あ、あああ……」

メリ…メリツ…

ずぷ…ん…!

「ほ、はいつてる、私の中に…
獣のが…」
「こんなのに
犯されるなんて…!」

吸血馬は知能も高いのが、
体をゆすりながら、
的確に巫女の体内深くに
巨根をねじ込んでいく。

「う、動かないでええ…奥に、
奥に入っ…入っ…入っ…」



ブルル、と馬が
勝ち誇ったようにいななく。

「……、こんなの……」

胃袋近くの所まで
長大なペニスが
自分の体を串刺しにしているのを
霊夢ははつきりと感じている。

(こんな辱め…許せない……！)



「いやあちよつとお邪魔しますよっ」

「貴方は下僕の……」

ホブゴ布林ーと言おうとした口を
矮躯の割に大きい生殖器が
塞ぐ。

「時間を止める力を
コト」した時計があるんでね、
色々止まっている間に
仕込ませていただきました。
弛緩薬も注射してあるので
ばっちり飲みましたよっ」

ペラペラしゃべりながら
ガスガス腰を振る
ゴ布林。
確かに噛み切る力すら
出ないから、
筋肉を弛緩させる薬は
射っているのだから。



霊夢は、パンツ状態だった。

怒りと屈辱と困惑。

そして何よりも、心の中心から

黒く拡がっていくのは

妊娠への恐怖だ。

メスの本能でわかる。

この馬は私を犯して

孕ませようとしている。

おそろしく生殖能力が

強化されているはずだ。

(う、動いてる、すごい
長さのストローク...)

どちゅん！どちゅん！と音を立てて、

吸血馬のペニスが、

霊夢の可愛らしい生殖器と

完全につながっている。

足の先までしびれるような

甘い快感が、

全身を支配し始めている。

これは...霊夢の肉体もわかっているのだ。
今犯しているオスが自分を孕ませる力に
満ちていることを。



「あ、うっ、ふむんっ、うっ……」

目の焦点が合わなくなってきたる霊夢。
顔は上気し、馬のペニス
濡れているのは
愛液の量がどんどん
増えてきているからだ。

「なんて可愛い顔をしてるのか……
しかも最強の霊力を持つ巫女。
喉の奥まで犯せるなんて
最高ですなあ……」

「あ、やばい……申利」「なにっ、
逃げられない、」のままで……」

射精、されちゅっ……」





びゅるるっ……!

びゅるるるっ!

「……!!!」

(逃げ…られなかった…射精から…
やばい、噴水みたいになってるじゃん…)

次に目を覚ましたときには
もう臨月間際だった。

またゴブリンが今度は霊夢の腫を犯しているが、
大きくせり出した腹が邪魔をして
にらみつけることすら出来ない。

「アンタ達絶対」
「ぶっ殺してやるから」

「霊夢さんが私達」してくれるのは
「殺す」の真逆ですよー」

「逆……」

「我々ゴブリンや仲間の下等な魔物の、
子供を産んでもらうんですから……
ですから逆です」

「……EIJ@……EIJ」

「おお怖い怖い。ですがその
恐ろしい霊夢さんの腫内に……」



「どっちら陣痛が始まったようです。妊娠期のセックスで膣内射精があまり推奨されないのは、精液の成分に子宮を収縮させる作用があるからなんですよ？」

「そ、そんな知識知りたくも、ないわ…」

う、うん…」

「…」

陣痛…」

（や、やだ、誰か、誰か助けて…）



めり…

ぶじゃあつ…!!

破水する感覚とともに、
足が霊夢の股間から
突き出てきた。

馬の足…
ソンド馬と自分のあいのだ。

「……」

荒い息をつきながら
ゴブリンをにらむ霊夢。

「絶対に…殺してやる…!」

いつの間にか周りに集まってきた
仲間のゴブリン達が、
どっと笑った。



足がでてから、なかなかの難産になったので、
ロープで前足をくくって引っ張ることにした。

細引きの要領で、
ぐいぐい引っ張られる痛さで屈辱し、
霊夢は何度も血が凍るような叫びを上げて、
最後には失神した。

「さあ、早く産んで！」

「おなごは、もう出てきたよ！」

「おなごは、もう出てきたよ！」

「おなごは、もう出てきたよ！」

「おなごは、もう出てきたよ！」

「おなごは、もう出てきたよ！」



レミリアの3倍はあるだろうかという

巨大なホブゴブリンが
まんぐり返しの体勢で

巨大なペニスを

もと主人の秘裂にすりつけている。

荷物運びをやらせていた
頭があまりよくない奴だ。

でもレミリアは

もともとそんなに

このゴブリンのことが嫌いではなかった。

こいつの丸太そのもののペニスを

ぶちこまれるなんてことは

夢にも思わなかったが。



「れ、れみりあさまあ…
ありがてえ、こんなオレに
と、とぎをしてくださってネ…」

メリメリ…

ぶちゅっ

「が、かはあ…っ」



「うおおっ！あ」がれの
かわいらしい吸血鬼の
オマ○コ……！」

「なんてきもちいいんだああ！！！」

「……うん……大きすぎるん……」



「ほ、ほげしい、激しいわっ！
シミアの体がつぶれちゃうっ……」

「シ、シめんよお……でも
きもちよすぎっ……
動きがとまんねえええ!!」

「ああ、だめだ、もっらちまっ、
シミア様の腰、シめんよお……」

「……来っ……」



どぼお……っ!!!!

「……!!!」



「うーめん、れみりあ様、
おらもっともっとしたい…!!!」

レミリアは苦痛に歯をくいしばりながら、
しっかりと頷く。

「い、いいよ…レミリアも、
こんなに自分のこと気に入ってくれるなら、
沢山頑張るから…」

「なんて…なんて健気なんだあレミリアさまああ!!!」



まさに火に油で、
それからさらに
レミリアは15回ほど犯された。
吸血鬼の再生能力でも、
三日間ほどは腫が元のサイズに戻らなかった。



「あゝ相変わらず最高だわ、締めりが
全く衰えないってすこいねえレミリア様」



「あ、あぁっ……も、もっだめっ……」
「また一人でイッてるよ……」
「しょうがない奴隷だなあ」

体の割に異常に大きなペニスを持った
黒い馬妖がレミリアの後ろから犯している。

「どうだいっそれお前の子供だよ」

「……」

「一番初めに妊娠させられた
ゾンビ馬と自分のあいなのだ。」

「そういえば……このペニスの具合は
おぼえがある気がする。」



「淫乱吸血鬼めっ！
これで妊娠したらおばあちゃんだな…っ！
射精るっ！飲めよっ！」

背後でいなく声とともく、
レミリアの膣内で
精液がはじけ散る。

（こんな…こんなものって…
ダメじゃないかな普通…）

意識が飛びそうになるのを
耐える小さい母の気持ちも知らずに、
その知能が低そうな馬妖は
腰を振り続ける。





美鈴が霊夢に助けを
呼んでいたという事は
霊夢の自白から明らかにしたので、
お仕置きの異種姦私刑が
行われることになった。

散々ゴブリンの精液で汚された
見事な肉体が草むらの上に
転がされる。

「……!!!」

声を押し殺して耐える美鈴。


ダンゴムシを巨大化させたような
甲殻類系のバケモノと、

なんだかよくわからない
肉塊のような怪物が、
同時に美鈴の体を
貫いた。

「き……気持ち……わるい……」

「アハハハ……いいえまだせ!!」

ヨプリン達は遠くで笑っている。



カサカサと激しく足を動かしながら、
美鈴の体をむさぼっていた
ダンゴムシのようなバケモノの
動きが変わり始めた。

全身を波打たせ、
まるで体液を
一箇所に集めているかのような
動きをしている。

「んっ…っ」

肉塊も同様だ。
二匹の醜いバケモノは、
美鈴の体に精液を
ぶちまける準備をしている。

焼けるように熱い粘液が、
二種類同時に膣穴に
叩き込まれた。

「かほっ……あ……」

虚ろな目でそれをただ受け入れる美鈴。

一滴のこぼれず流し込む、という気迫すら
感じる執拗な動きで、

何回も何回も

美鈴の体内奥深くへと、

精液を絞り出し続けるバケモノ達。



妖怪の類は異常に成長が早いものがある。
こいつらもその例にもれず、
美鈴の腹は相当の大きさまで
たった30分で成長した。

「な…なに」れ…」

何かをしようにも養分も霊力も
全て腹の中の仔に吸い上げられ、
指一本動かすことが出来ない。

3時間ほど、
陣痛との戦いを続けた美鈴。

そして、苦痛のあまりに
失神しかけたころ、

汚らしい怪物が
二匹同時に生まれ出た。

「ふ……あも……せり……」

美鈴は誰に聞かせるでもなく
ただ泣き続ける。



小悪魔は触手の海に
放りこまれていた。

「きざし……Eー体」は……E」

周りは一面黒光りする
粘液まみれの触手。
どうやら外に助けを
呼びにくい最中に
捕まったらしい。



くちゅ…

無毛のかわいらしい股間に
太い触手が一本
押し当てられる。

「ひゅ…ひゅ…」

「い、いやあつ……い、いやあつ……」
「そ、そ、だめだつてばあ……」

ついに細い触手の奔流が
秘められた子宮回をこじ開け、
一斉に内部になだれ込んだ。

小悪魔は当然誰も触れたことのない
最も奥の部分をいじられ、まさぐられ、
犯される恐怖と、快楽に身悶える。





触手の外側は一切動かないが、
内部では
すごい勢いでフランジ状の
細い触手の束が
前後左右に動き続けている。

「ん、うっ……んんんっー！」

悲鳴を上げることもままならない。
口には別の触手が突っ込まれているからだ。



「こいつ、確か他の悪魔を使って繁殖するタイプの下等な魔物だ…」

「逃げなきゃ…」

「に、妊娠させられちゃう…」

「に、逃げなきゃ、だ、だめ……！」

触手の動きは激しさを増し、絶頂がちかいかいことを教えてくる。

そして子悪魔自身もまた絶頂へと強制的に向かわされていた。

「も、もうだめ、い、イク……っ！」



「く、苦しい…だれかあ…
咲夜様、パチューリ様あ…」

腹は醜く膨れ上がり、
もとから大きいバストはサイズを
少なくとももうは上げていた。

すっかりはらまされてしまっている。
後はもう、絶望の出産だけだ。

「く、苦しいよお…！こんな
バケモノの子供なんて
産みたくない…！」

「う…産まれる…」

へきへき、とけいけいな音をたてて、
おそろくは恥骨結合を
半ば引き裂くようにしながら、

醜い触手塊が
小悪魔の産道から
ひり出された。

「レ、レミリア…様…」

小悪魔は
消え行く意識の中で
大切な紅魔館の主人の
ことを思った。

「どうか、レ無事で…」



「あ、ああ…咲夜あ…」

「レ、レミリア様…こんな…」

咲夜とレミリアの主従が、
上下に重ねられて犯されている。
肉柱とも呼べるほどの
巨大なペニスが、
かわるがわる二人を蹂躞している。



「ぐ…っ…あぁ…っ…」

「あぁ…「ん」な…」

激しく噴出する精液。

ただ身を震わせて、
それを受け止めること以外、
彼女達にできることはない。





後ろから飛びつかれ、
胸をわしづかみにされる霊夢。

「あ…終わった…」

「脱走しようだったってそうはいかんぞ……」

乳を思い切りもみしだかれ、
あつというまに体の受け入れ態勢が
出来上がってしまう。



するり、と服を剥かれ、
犯され始める。

むちむちの巨乳は
ますます張り詰めていて、
見るからに成熟しきっている。

くそ…もう…だめか…

霊夢と美鈴は何度も何度も脱走や反抗を
繰り返そうとするので悩みの種だった。

そろそろ処分しなければいけない時期かもしれない。

ガッツリと犯され、
全身真っ白になりながら、
霊夢は荒い息をついた。

後ろからサルの鋭いキバが迫っている。

（そっか…家畜だもんね、私達…
孕ませて、産ませて、言うこと聞かなかつたり
年とつたりしたら…処分か…）



レミリアもフランも、

小悪魔も咲夜もパチュリーも、

まだ生かされているメンバーは
残らず犯されている。

霊夢と美鈴は
その強い性格が災いし、
下層で処分されること
になってしまったようだ。



女達は一人残らず
ゴブリンの仔をはらまされ、
膣内に射精されている。

淫欲の宴は何時終わるとも知れず、
レミリアたち紅魔館の面々は
幸せな肉欲の地獄へと
沈んでいった。



異種×紅魔館

～ F I N ～